

論考

文明と子どもの命／親の“愛”——歴史と文学に学ぶ心理学

柏木 恵子 Keiko Kashiwagi

(東京女子大学名誉教授)



はじめに

「こころの未来」解明をめざすセンター誌に、あえて「過去に学ぶ」ことを書こうとしています。

人の成長発達には社会に否応なく拘束されていることは、発達心理学や文化心理学が明らかにしているところです。しかしそこで扱われている社会、環境なるものはごく最近の、しかも先進国の極めて限定されたものにすぎません。心理学の研究の歴史は浅く、たかだか100年、今日とは大きく異なる社会状況の中で人々がどう生き、何を喜びとし、どのような悲哀を味わっていたかはまったくわからない、お手上げです。歴史や自伝／書簡を含む文学は、心理学の手の及ばない過去の人々の生活や喜怒哀楽を雄弁に示し、現代の人々の生活と心理がいかに最近の社会——文明／文化によくも悪くも拘束されているかを教えてくれます。親子の関係や子育てに関心をもって研究してきた私にとって、歴史／文学に散見される子どもの誕生／命、その親の生活、子どもへの親の愛／育児の様相は、視野の狭さを払拭し、新しい研究課題への刺激に満ちています。

親にとっての子ども、その命の意味——文明が変え／つくり出すさまざまな命

最近、出版された15～16世紀ドイツの画家デューラーの『自伝と書簡』の冒頭に、家譜——家族の誕生についての記録があり、デューラーの父は妻バルバラが産んだ18人の子どもの誕生の日時、洗礼と命名について逐一記しています。表1

は家譜の一部——6番目と7番目、8番目の子どもの時のものです。

バルバラは享年63歳、当時としては長生きでしたが、その生涯の3分の1にあたる23年間、子を産み続けていたのです。しかし産んだ18人の子どものうち、成人したのはデューラーを含む男子3人だけでした。この話のある若い母親にしたところ、即座に「子どもを産む機械みたいじゃない！」と呆れ、感嘆もごもごの感想を述べたのでした。しばらく前、当時の厚労省大臣が「女性性は産む機械」と発言して世のひんしゅくを買ったのとまったく同じですね。でも、産んだ体験のある女性がいうのと男性、それも為政者である男性がいうのとでは、言葉は同じでも意味も重みもそこに込められた感情も違います。

少し時代は下がりますが、作曲家バッハ夫妻の家でも19年間に13人の子どもの誕生しました。しかし、多くが夭折し、親以上の年齢まで生き長らえたのは4人にすぎません(マルティン・ベッツォルト、2005年)。ほぼ同時代のスペインの画家ゴヤの妻も20回ほど出産しましたが、成人まで生き延びたのはたった1人、他の19人すべてを夭折させています(森、2002年)。

さて、少子化は今や日本の大問題となっています。しかし少子——夫婦が2人か3人の子どもの育て残すということは、すでに人類は体験済み、デューラー、バッハ、ゴヤの家庭はいずれも少子とあってよいでしょう。今日の少子(化)で大騒ぎすべきは、子どもの数の問題ではなく、子どもというものがどのように誕生するか、つまり子どもの命の出自の決定的変化、そのことです。18人、20人も子が生まれた、けれども2人か1人になってしまったのがデューラー、バッハ、ゴヤの家庭。子どもの誕生も夭折も親の意思や力



表1 デューラーの母の6～8番目の子どもの誕生の記録

6番目の子ども	キリスト降誕後の1474年、聖ドミツの日(5月24日)の2時に、妻のバルバラは私のため第六子を産んだ。その子のため金細工師のウルリッヒ・マルクが名付親となって私の息子をアントニーと命名した。
7番目の子ども	キリスト降誕後の1476年、聖セバスティアンの日(1月20日)の1時に、妻は私のため第七子を産み、アグネス・バイヤー嬢が名付親となって、私の娘にアグネスと命名した。
8番目の子ども	その後1時間あまりして妻はもう一人の娘を苦痛をもって産み、その子は急場の私洗礼を受けてマルガレータと名付けられた。

(デューラー、前川誠郎訳『自伝と書簡』岩波文庫、2009年より)

デューラーの母バルバラ(デューラー画)

の及ばないこと、子どもの命は人知を超えたものから親に「授かる」ものであったのです。それが一変しました。今日の少子(化)は、子どもは2人にした、親の意思・決断の結果です。子どもの命は親の意思の下におかれ、親の「つくる」ものとなったのです(中山、1992年、柏木、2001年)。

「子どもを産む」ことへの感情

——“おめでとう!”といえる出来事?

ところで、このように次々と妊娠し、しかも死産も夭折も日常的、加えて母親自身が命を落とす産死さえ稀ではなかった時代、当時の人々はこのことをどう受け止めていたのでしょうか?

デューラーの父は18人の子どもの誕生を淡々と記録し、妻は「自分(夫)のために」子を産んだと記しています。妻の出産は夫のため、家

のためだったのです。当時の社会を支配していた教会は「産めよ殖せよ」を夫婦の信条として奨励していました。為政者にとっても税金や兵力のため多産は奨励すべきものでした。そして、〈結婚—セックス—妊娠—出産=子ども〉という連鎖は自然／当然のこと、そこで「機械」のように矢継ぎ早に妊娠し出産したのでした。

しかしお産の当事者——女性たちはこれをどう受け止め感じていたのでしょうか? 妻バルバラ自身はなにも記録を残していません。バッハやゴヤの妻の記録もありません。しかし、多産を体験する女性の周囲にいた女性たちは、相次ぐ妊娠を決して歓迎していなかった、それどころか嫌悪と哀憫の感情を抱いていたようです。19世紀イギリスの女性小説家ジェイン・オースティンの手紙はそのことを率直に伝えています(表2)。いずれも妊娠を「おめでとう!」

とはいっていない、それどころか嘆かわしい、何たることとみなしています。教会や夫／男性たちは歓迎していた妊娠・出産を、女性たちは忌避したいと思っていたのです。これは妊娠—出産という命がけの体験をする女性の本音。親しい姉あての手紙だからこの本音が書かれたのです。

フランスの書簡文学者セヴェニエ夫人も、再三の妊娠を知らせる娘への返書に、(わたしは)孫が生まれるなど嬉しくもなく喜んでぞない。あなたの命が心配でたまらない。こうならないよう婿殿にいつてやりたい、といったことを書き送っています(アリエス、1999年)。

なぜ少子か? ——「なった」少子と「した」少子=人口革命

さて、日本をはじめ先進国では、死産も産死も稀となり妊娠／出産の



ジェイン・オースティン

表2 ジェイン・オースティン、姉あての手紙の一部

1807年2月7～8日付
 (あまりよくないニュースを書いたあとで)
 「デイズ夫人がまたまた子供を産むことも嘆くべきでしょう」
 1808年10月1～2日付
 「テイルソン夫人は可哀相な人！
 なんだってまた妊娠しているのでしょうか？」

(ジェイン・オースティン、荒井潤美編訳『ジェイン・オースティンの手紙』岩波書店、2004年より)

危険はほとんど消滅しました。けれども、女性たちは今も子を産むことを手放して歓迎してはいません。依然として躊躇、迷い、そして忌避、断念も稀ではありません(青木／丸本、1991年、本田、2007年)。

〈結婚—セックス—妊娠—出産=子ども〉の連鎖が切れた！

〈結婚—セックス—妊娠—出産=子ども〉の連鎖は、種の保存のための本能の営みとしてながらく当然視され実践されてきました。この連鎖が断絶しました。「結婚しても子どもをもたなくてよい」との意見は先進諸国では過半数を超え、結婚は子ども／子孫を残すためとの考えは今や皆無に近い状況です。そしてセックスは結婚とも子どもとも無関係、「合意すればOK」と一緒に食事するのと変わらない日常茶飯のこととな

りました。どうしてこうなったのでしょうか？

医学の進歩と衛生や栄養などの改善は、乳幼児死亡率を急速に低下させました。日本は乳幼児死亡率1000人中3人と世界最低、このことは子どもの命がほとんど死なない強靱なものになったことを意味します。そして「子は生めば必ず育つ」との確信を親たちに持たせることになりました。そこで、子どもが次々と生まれてくるのを放置せず、事前に子の数や時期を決めるようになりました。ながらくご法度だった避妊と家族計画が公然・当然のものとなりました(太田、1991年、荻野、2008年)。このように乳幼児死亡率の低下を背景に、子どもの誕生、子どもの命は親の意思／決断の下におかれるようになったのです。意思／決断の結果が少子で、少子になったのではなく少子にしたのです。

「つくる」理由

——「社会／家のため」から「自分のため」

子どもは自然の摂理によって「授かる」ものではなく、親の意思／決断の結果、「つくる」もの、親の人工物ともいえるものになりました。「(子どもふたりで)豊かな生活」が戦後の目標、やがて「少なく産んでよく育てる」とのスローガン下、多子が避けられました。さらに少子の理由として、「自分のため」がクローズアップしています。なぜ子を産むか(／産まないか)を検討しますと、多子を守るのみならず、子産みそのものさへ躊躇する最近の事情が窺えます(表3、柏木／永久、1999年)。(余談ですが「なぜ子を産むか」がリサーチクエストとして成り立つこと自体、今日ならではすね。)

年配の世代では、「(結婚したら)子どもをもつのは当たり前」「次の

世代をつくるのは(結婚した夫婦の)責任」、また「家名やお墓を継ぐ」など、社会や家のためという社会的責任感強いものでした(今もそういう政府は安泰ですね)。それが若い世代では一変します。社会や家のためという責任感稀薄で、「育ててみたい」「老後に安心」「しごとの区切りがついた」「2人の生活は十分楽しんだので生活を変える」など、自分自身にとって子どもや出産／育児が意味あると認める、自分の生活に障害にならないことが子産みの理由です。「(うちは)2人生んだ、責任は果たした」と発言する前首相のように、社会的責任で子どもをもつ人は今やほとんど例外的です。「妊娠出産を体験したい」という、オースティン時代の女性たちなら驚くような理由も少なくありません。女性だけにできること、ならば一度は、とあってでしょうか。妊娠出産が安全になり避妊も当然になった状況の中で生まれた新しい欲望といえるでしょう。漫画本『私たちは繁殖している』(図1、内田春菊、1996年)がベストセラーになったのは、出産体験へのつきない興味と若い世代での産む理由を反映するものでしょう。

さらに、科学／医学の進歩はいわば「造り出される」子どもの命も実現させました。セックスなしの妊娠、配偶者以外の精子や卵子による妊娠、配偶者以外の子宮による妊娠／出産など、かつてない形の子どもの誕生です。しかしこの生殖医療は単純に不妊カップルへの福音とはいえません。経済的・心理的・身体的負担の大きい治療を受けるか否かの重い選択、いったん始めると容易に諦められずカップル間に生ずる葛藤(小泉ほか、2009年)、さらに被選択者であり弱者である子ども側の出自を知る権利など、新たな課題や苦悩をもたらすことになりました。また、親とは誰か、生殖医療を適用する条件などの法整備と人々の価値観に関わる多くの課題を提起しています。

育児不安はなぜ？

——種の保存と個体の生存成長への資源投資をめぐる葛藤

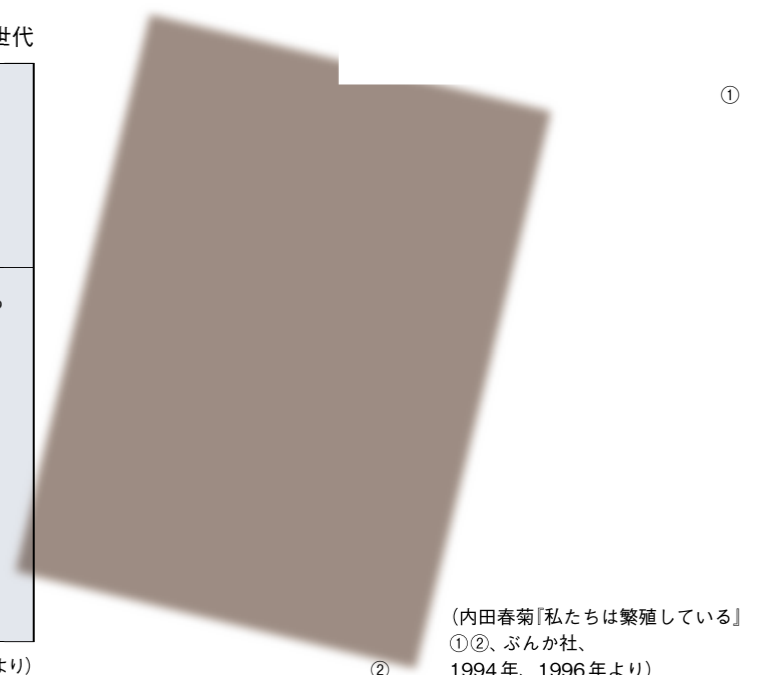
こうして生まれてくる子の育児はすんなりされているのでしょうか？ 育児不安という日本特有ともいえる現象が母親の間に広くみられます。その育児不安の内実は、子どもや育

図1 内田春菊『私たちは繁殖している』

表3 子どもを産むと決断した理由——年配世代と若い世代

60歳世代で顕著な「産む理由」	結婚したら産むのが普通 生み育ててこそ一人前 次の世代をつくる 生き甲斐になる 姓やお墓を継ぐため必要
30歳世代で顕著な「産む理由」	2人だけの生活は十分楽しんだから 妊娠・出産を経験したいから 夫婦関係が安定したので 年をとったときいきなり淋しい生活に変化が生まれる 自分の生活に区切りがついたから 経済的なゆとりができたから 仕事が軌道にのったので 手伝ってくれる人がいたので よい保育園があったから

(柏木・永久、1999年より)



(内田春菊『私たちは繁殖している』
①②、ぶんか社、1994年、1996年より)

児についての不安よりも、育児だけしている自分についての不安／焦燥／不満の方がずっと強いのです（数井ほか、1996年）。育児と母親自身の生活／活動とが対立葛藤しているのです。このことは、「母親なのに」「ジコチューだ」「大事な育児をないがしろにしている」という非難で済むことでしょうか？

哺乳類であるヒトの繁殖一種の保存は、〈妊娠＝胎児の女性体内での成長―出産―さらに養育〉という一連の過程ですが、この営みは、時間、栄養、体力、気力など母親がもつ資源の投資にほかなりません。ところがこの資源は有限で、しかも同じ資源が親自身の生存／成長にも必要です。そこで、有限資源を繁殖（妊娠／出産／育児）と自己成長の2つにどう配分投資するかが問題になります。双方にそれぞれ配分されていれば問題は生じない。ところが、片方だけに資源投資が偏り他方への配分が欠けた状況では、資源の持ち主——母親に不満や不安が生じます。日本の母親に育児不安が顕著なのはこれが一因です。日本では子どもの誕生と同時に、しごとを辞め専業主婦となる女性が今も7割います。すると、その母親は自分の時間も活動もほとんど持たなくなる、もう一人の親は稼ぎ手で育児不在になりますから、子育てにすっかり拘束されてしまうからです。いくら子どもはかわいい、育児は大事と思いつつも、自分自身の関心や能力を発揮したり育てる機会から疎外されてしまっている、そのための不安、焦燥、不満なのです。先の「産む理由」にも、子どもをもつことが自分にマイナスにならないか、メリットがあるかを検討している様相がみられましたが、ここには予想される育児と自分への資源配分に慎重な態度をみることができます。

“いろいろな”「つくる」 少子への親の愛情と教育

今、子どもの出自に関して“いろいろな”子どもがいます。かつては、やさしい子、活発な子、頭のいい子というふうに関性においていろいろな子どもがいましたが、今日はその出自において多様な子どもがいる史上初の時代です。つくった子、つくり出された子、できちゃった子というふうに……。子が親の意思に無関係に「授かる」多子の時代と今日とでは、親にとっての子どもの位置・意味が決定的に違います。このことが親の子どもへの愛情、関心、教育的営為を変質させつつあります。

親の決断によって「つくった」子どもは、（社会の子どもでなく）親に属するものと捉えられ、親のもちもの的な存在、まさに「我が子」となりました。しかも子は親の心身経済の多大な投資によって「つくった」「造り出された」のですから、その子どもに対して親は強い思い入れを持ちやすいのです。つくらない選択もある中で、自分の意志と決断によってつくったからにはといわんばかりの物心両面にわたる関与、子の発達、とりわけ知的発達への高い期待、その実現のための数々の教育的営為。これらは「つくる」少子の時代ならではのことで、

先進諸国では、子どもの知的発達に強い関心と期待があり、それを促す教育を子に念入りに施すのは当然とされています。しかしそれは、子どもの命がいつ果てるかもしれぬ時代、そして親の寿命も見通しの立たない時代にはあり得ないことでした。たくさんの子が次々と授かる、しかし子の命は儂かった時代、また今日に比べて貧しかった時代、親たちが子どもにしてやれたことは限り

がありました。子が無事に育つように、健康でさえあればと願ひ、他方、親がいついなくなっても1人で生きられるよう独り立ちを促すことが養育のゴールでした。そしてそのために乏しい家計のなかで「できるだけのことをしてやる」、これがせいぜいだったでしょう。

豊かさのなかの貧困な育ちの環境

——「よかれ」が支配／暴力に

発展途上国の親子をつぶさに研究したアメリカの文化人類学者LeVine Rは、子への親の愛情と養育目標は子どもの生存率によって異なると指摘しています（1994年）。今日の親の愛情と養育の営みは、最低となった乳幼児死亡率の下、「生めば必ず育つ」という確信と、子を「つくる」少子時代ならではのものです。長寿命化も子どもの発達環境を変化させました。今、子どもがかなり大きくなるまで両親双方の祖父母4人が健在な家庭は珍しくありません。親に加えて祖父母からも少子に注ぎ込まれる熱い期待と物心の投資、これは前代未聞のこと。この状況は子にとってはたして幸せといえるのでしょうか？

今日、親の「よかれ」と「できるだけのことをしてやる愛情」は、子の発達権を侵害しつつあります。子の自発性や個性をないがしろにした親の「よかれ」の支配、「できるだけのこと」をする過剰な介入が、子どもの不適応症状や親への叛乱を引き起こしている例は少なくありません。多子で親も富裕ではなかった時代にはうまく機能していた「できるだけのことをしてやる親の愛情」は弊害化し、「よかれ」との親の「愛情」が「やさしい暴力」「愛という名の支配」となっている事例は少なくありません（柏木／平木、2009年）。成

人子が離家せず、親から住居と家事万端の世話を受けているパラサイト現象も、「できるだけのことをしてやる」親の「愛情」が子の成熟と自立を阻害していることは確かでしょう（宮本、2004年）。

教育熱心というものの、親自身と子の直接の交流は乏しく、教育は塾やおけいこなど外注。子どもの成長発達にとって何が重要か、当の子どもの個性と志は何かを問うより先に、成長し続ける教育産業の受益者に甘んじ、子どもがもつ育つ力と心は疎外されています。豊かな社会の中で、物心両面にわたって子に降り注がれる関与／介入は、豊かさの中の貧困といえるのではないのでしょうか。

このような風潮は、子の養育責任が母親だけに集中してしまっていることも一因です。近年、家族の機能は成員の心身の安定と子の社会化つまり養育に収斂しましたが、この「教育家族」で養育役割が極端に女性に集中しているのが日本です。一任された子の養育に「失敗は許されない」とばかり過剰に関わる、また自分自身の活動から疎外されていることから子の「成功」を即自分の成功と同一視する代理達成などに陥りやすいからです（本田、2004年）。

おわりに

最近、生命学、死生学という新しい学問領域が登場し活発な論議を提供しています。そこでのテーマは主として尊厳死や死の判定基準などおとなの生と死の問題、子どもについては生殖医療に関するものに留まっています。本稿で取り上げた子どもと（母）親の命の問題は、命があまりにも強靱となり長命ともなったことで、一顧だにされないくらいがあります。けれども、子の命は儂く親の命も定かでなかった時代の人々の生き方や親と子の関わりをみます

と、今日見失ってしまったものの大きさに改めて気づかされます。

最近再読したトルストイの『戦争と平和』の1シーン。戦地で九死に一生を得て奇跡的に帰還したアンドレイ、彼がまず遭遇したのは子の誕生とその母つまりアンドレイの妻の産死、これらはまさに本稿のテーマそのものでした。その後のアンドレイたちの生涯は、常に死の影を意識する中で、今ある命を大事に味わいつくす緊張の中にもいきいきとしたものでした。子はよもや死なない、平均寿命ぐらいは生きるだろうとの楽観の上で、時間も心身エネルギーも無限であるかのようのどかに浪費してはいないだろうか？ そして加速度的に進歩する文明の便利さを「恩恵」と享受することに走り、人類の未来を展望して今どう生きるか、何が幸せかについての省察を怠っていないだろうか？ 文明の進歩に英知が追いついていない、そのギャップが埋められずどんどん大きくなってしまわないか？

このような「こころの未来」に強い関心・寒心を抱いています。先に「豊かさの中の貧困」と記した昨今の親の子への養育的営為もその一端。科学技術という文明の進歩が子どもの命を変質させ、親の愛情と教育的関与も変化させた、その科学技術に恃む姿勢、人知を超えたものへの畏敬を忘れがちな傾向から、未来の子どもが育つ条件と親の役割の再考（柏木、2008年）を願わずにはいられないのです。

参考文献

デューラー、前川誠郎訳『自伝と書簡』岩波文庫、2009年。
マルティン・ベッツォルト、鈴木雅明監修、小岩・朝山訳『バッハの街——音楽と人間を追い求める長い旅へのガイド』東京書籍、2005年。
森洋子『子供とカップルの美術史——中世から18世紀へ』NHKブックス、2002年。

中山まき子「妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識——子どもを〈授かる〉〈つくる〉意識を中心に」『発達心理学研究』2、1992年。
柏木恵子『子どもという価値』中公新書、2001年。
ジェイン・オースティン、荒井潤美編訳『ジェイン・オースティンの手紙』岩波文庫、2004年。
アリエス、P、成瀬駒男・伊藤晃訳『歴史家の歩み』法政大学出版局、1999年、357～358頁（セヴェニェ夫人の書簡引用は井上究一郎訳『セヴィニェ夫人手紙抄』岩波文庫）。
青木やよひ・丸本百合子『私らしさで産む、産まない』農文協、1991年。
本田和子『子どもが忌避される時代——なぜ子どもは生まれにくくなったのか』新曜社、2007年。
太田素子「家族計画の思想」『シリーズ変貌する家族 1 家族の社会史』岩波書店、1991年。
荻野美穂『「家族計画への道」——近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店、2008年。
柏木恵子・永久ひさ子「女性における子どもの価値——今、なぜ子を産むのか」『教育心理学研究』47、1999年、170～179頁。
内田春菊『私たちは繁殖している』①～⑨、ぶんか社、1994～2009年。
小泉智恵ほか「生殖医療と家族の発達：非典型的な家族をいきる」日本発達心理学会第20回大会、シンポジウム、2009年。
数井みゆき・無藤隆・園田菜摘「子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について」『発達心理学研究』7、1996年、31～40頁。
LeVine R.A.et al.1994 Childcare and culture: Lessons from Africa. New York Cambridge University Press.
柏木恵子・平木典子『家族の心はいま——研究と臨床の対話から』東京大学出版会、2009年。
宮本みち子『ポスト青年期と親子戦略——大人になる意味と形の変容』勁草書房、2004年。
本田由紀『「非教育ママ」たちの所在』本田編『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』勁草書房、2004年、167～184頁。
トルストイ、藤沼貴訳『戦争と平和』全6巻、岩波文庫、2006年。
柏木恵子『子どもが育つ条件——家族心

松生 歩 Ayumu Matsuike

(画家、京都造形芸術大学芸術学部教授)



詩や絵が生まれるとき

私は絵を描いている。
一応日本画というジャンルにいる者として位置づけられているのだが、ふだん自分が日本画家だということを意識することはほとんどない。使っている画材が岩絵具なのは、確かに日本画の証のようにも思えるが、洋画家が岩絵具を使ったって何の問題も生じないのだから、画材だけがジャンル分けの決定打というのも不自然である。

他の人から見てどう映るのかは自分ではよくわからないが、「日本画」ということではなく、「日本の昔からの絵画表現」の中で、私が共感し馴染んでいるものに、絵巻や南画のような、物語や詩と一体になった表現があるのは確かである。

私はたいていの場合、自作の詩や物語と連動した絵画作品を発表してきた。実際に絵と並べて文章も展示することが多いのだが、絵だけを展示している場合でも、自分の中では必ず作品の中に詩があった。そもそも作品のイメージが浮かんでくる時、映画のように言葉と映像が同時に出てくるので、切り離しようがなかったからである。

私は自分で言うのも変かもしれないが、いたって生真面目で堅物で苦勞性・貧乏性で、依怙地に自分を苛めてやたら卑屈に頑張る性格である。しかもその頑張りがたいい空振りの連続で、何の成果もなくいつも汲々としている、かなり無能な人間である。

しかし、どういうわけか絵や詩の発想だけは、机に向かって頑張ったことがない。というより、頑張ったら絶対浮かばない。机に向かっては

何も見えたことがない。

見えるのはまったく別の状態の時だ。けれどだからと言って、絵や詩を書くのが楽なわけでも上手いわけでもなく、いつもいつも苦勞している。100枚の絵を描けば100枚ともどん底の駄作で、自分はこの世にいる資格のない人間だとさえ思い詰める。けれど、200枚目か300枚目に突然、「勝手に出来上がる」という事態が訪れたりする。

その時だけが、本当に「絵が生まれた」ということなのであろう。「自分が描いた」のは本当の絵ではないのだ。けれども、描いて描いて描いて、気が遠くなるほど苦しむプロセスの中でしか、「生まれる」という事件は起きてくれない。

では、詩や絵が生まれるとは、一体どんなことなのか、自己を振り返りつつ、考えてみたい。

頭の中の言葉

人間の頭の中には絶えず言葉が氾濫している。子供はいったいいつごろから、自分のところに浮かんだ思いを言葉で反芻し始めるのだろうか。気がついたら、ものを言葉で考えるようになっている。おかげで気を許すと、頭の中はしょっちゅう雑音だらけになる。嫌なことがあったとき、苦痛から逃れたいとき、逆に楽しい予感がするときも、私たちは頭の中で休みなくせりふをつぶやき続ける。感情が高ぶってくると、自分でも止めようのないくらいすさまじい勢いで言葉が押し寄せては流れ去ってゆく。自分の考え出したせりふに追い立てられるように、次々と思考が生まれて変遷し、いつの間にか自分の言葉で自分の感情をさらにあおり続けていることに気づいたりする。

しかし、この場合の言葉はいうなれば「ゴミ」だ。そこにはまったく真理はない。



宮沢賢治『銀河鉄道の夜』から「天気輪の丘」松生歩、2006年

言葉の力

言葉というものはおそろしい。口に出してしまえば、周囲の者の感情や、自分の置かれた状況に確実に変化させる。また、口に出さなくとも、自分のところの中でつぶやいた言葉は確実に自分の脳に働きかけ、自分の行動と運命を変化させてしまう。なぜ、言葉にはそんな力があるのだろうか。

もちろん、数え切れないほどの理由と由来とデータがあるはずだが、今、日常自分が感じている言葉の力を3つだけ挙げるとすれば、1つは「音としての力」、もう1つは「感情と結びついたときの力」、さらに「魂から降りてくる力」がある。

まず、「音としての力」であるが、私は言語学にも宗教にもまったく知識のない身であるが、言葉に「音」としての力があるということは感じている。特に母音には何か身体に及ぼす規則的な力があるように思う。音とは、振動とか、周波数と言い換えてもいいかもしれない。人間の言語に限らずとも、動物の鳴き声でも、

木の葉のざわめきでも、波の音でも、人間には聞き取れないイルカやコウモリの発する音でも、何がしかの影響を人に与える。また、人間の奏でる音楽や、優しい語りかけが、動物の育ち方に影響を及ぼしたりもする。どんな物も固有の波長を持っていて、お互いに影響を与え合っているのが世界の姿なのかもしれない。その中で、言葉は「音」としてだけでなく、「意味」をも持つものであるから、影響力はさらに大きいといえるだろう。

次に「感情と結びついたときの力」は、さらにもっと強力である。喜怒哀楽のそれぞれの場面で、人はさまざまな言葉を発するが、特に怒りの感情が言葉となって発せられたとき、その言葉が相手を傷つける力には恐ろしいものがある。プラスの感情、愛のある感情から出てくる言葉には、相手を励ましたり高揚させたり、暖かな波動で包み込む力があるが、マイナスの感情から発せられる言葉は、相手を暗い闇に引きずりこんでしまう強力なパワーがある。感情から発する言葉には、明らかに目に見える形で相手を変えてしまう力

があるのだ。それゆえ、人は自分の発する言葉に注意を払い、責任を持つべきであろう。

ところで、本稿で扱いたかったのは、最後の「魂から降りてくる力」としての言葉である。

降りてくるということ

言葉はところの中に生まれる。正確には脳の中に生まれると言った方がいいのかもしれない。前述の「ゴミ」と称したところの中の雑音は、表層意識の中を漂っている無常な存在である。感情に由来して派生してくる言葉の多くは、この類であると思う。

一方、「降りてくる」言葉は、自分の頭で能動的に作り出したものではない。それはおそらく深い潜在意識の中から、ある条件の下に浮かび上がってくるもののような気がするのである。

人はふだん衣服を身にまとうように、ところにも感情という衣をまとって生活している。親切で優しい人でも、一皮剥けばところの中にはどろどろしたものが蠢いているもの

だ。その方が人間らしいとも言えるし、だからこそ詩や絵も、ただ綺麗なだけのものは嘘臭い。

暗く、グロテスクなものの方がリアリティが感じられ、それこそ本物の芸術だと時に評判になったりもする。

しかし、そんなに単純なものだろうか？ 確かに、一皮剥けば人間は汚い。隠していた感情があらわになるから。しかし、潜在意識の底に向かって、すべての感情を剥いて剥いて剥いて、どこまでも剥き続けてゆけばどうなるだろう。そこに現れるのは透明な光のような存在ではない

だろうか。

徹底的に自我の衣を脱ぎ捨てたら、最後には自他の区別も必要がなくなる。区別は自分が安心を手に入れようとして、逆に恐怖に駆られて作り出していたものに過ぎないとわかるから。区別が自ずから消滅したとき、そこで初めて人は限りない自由を手に入れる。

その境地にいるとき、すべての存在物の波動が伝わってくる。見えるもの、見えないものすべてに自分が見守られている実感に感謝があふれ、音にならない音を聞き、見えないものを見ている感覚がある。自分

はただただ透明で、木とも水とも風とも、遠い宇宙とも結び合っている。その時、言葉が降りてくる。

言葉と共にビジョンがあらわれる。

私には感知できないけれど、音に敏感な人なら、そのとき映像ではなく音楽が生まれてくるはずだ。また別の人は踊りたくなるかもしれない。

芸術の始まり

ビッグバンのお話を聞いたとき、それならビッグバンの前の宇宙はどうなっていたのかと不思議に思うのは誰

しもに共通した思いではないだろうか。私たちは今、生命の進化の枝分かれの先端として生きているけれど、枝から幹へ、幹から根へ、根から地球へ、地球から銀河へ、銀河から宇宙へ、宇宙からその先へと思いを馳せるたびに、枝分かれしていた意識が大元に向かって太く一元化してゆく。その源には何があるのだろうか。私たちの正体とは何か。

頭で考えてもわからないけれど、私たちのDNAと潜在意識には、それが刷り込まれているはずだ。そして、生命が成長を欲して止まない理由も、結局は進化の螺旋を上昇することで自らの出自を思い出し、帰還したいという願望からのような気がする。

その願望は、きっと大昔から、祈りや表現活動と結びついてきただろう。「降りてくる」何かを、人々はさまざまな方法で表現しただろうし、それを皆で共有しただろう。そ

の中で自己と他者との境界がなくなる体験をも共有できたであろう。そんなことが芸術・芸能の始まりだったような気がする。

詩と絵とところ

真理に少しでも近づく、あるいは近づきたいと願う純粋な意識が表れた詩や絵が、数万行に1行、数千枚に1枚しか創り出せなかったとしても、ここに「降りてくる」ものを待ち続けて創作に打ち込むことは幸福である。大変な苦勞に満ちた幸福である。そしてまた、そのような様々な芸術に触れ、ここで味わうこともまた、大きな幸福である。ただしこの場合の「ところ」には汚れた感情を廃した、静かな水面のような状態がふさわしい。

仮に、私たちの生命が、例えば永遠とか宇宙の本体と思われるくらいの、ある大きな「ひとつのもの」の

細胞のような位置づけだと想像してみれば、ある細胞はものを作り、ある細胞は作られたものを味わうことで追体験し、両者は常に感動の波長を共有する。そしてその波長は本体の「ひとつのもの」と同調して常に美しい響きを奏でる。そしてまた、「ひとつのもの」からも常に響きは細胞に届けられる……。

このような想像は、無意味なことであろうか。「絵は自分のために描く」のが正論のように言われたものだが、私にはずっとじっくり来なかった。「他者のために描く」というのもおこがましいことだ。「芸術のため」というのも格好をつけすぎているように感じる。絵は、私たち存在物のすべての根底に流れている何かに向かって、その融合のために描いているように、私には思える。

そしてそれは、音楽や文学、舞踏を始め、すべての芸術に共通していることのように感じるのである。



「気配」松生歩、2005年



「午後の慈光」松生歩、1983年



「すばるへ そしていちのために
わたしたちがえがいてきたもの
わたしたちがいのって来たこと」
松生歩、2009年

友永雅己 Masaki Tomonaga

(京都大学霊長類研究所准教授)



私は、愛知県犬山市の京都大学霊長類研究所でチンパンジーの認知能力とその発達について研究している。この地にやってきたのはソウルオリンピックの年だった。もう20年以上が経過したことになる*。

比較認知科学 — ところを支える「進化」 という時間軸 —

私たちのところとは一体どのようなものなのだろうか。これは私の追い求める究極の問いだ。チンパンジーを研究しているのに、と言うなかれ。私は人間のところというものを「時間軸」の中で捉えたいと考えている。まずその1番目は「進化」という時間軸だ。それがチンパンジーという生きものを相手にほぼ四半世紀も研究してきた理由だ。人間のところはどのように進化してきたのだろうか。最近はこのところの研究に「進化」という時間軸が盛り込まれることにみんなさほど違和感を抱かなくなってきたようだ。しかし、私たちのところがからだと同様に進化の産物である、という当たり前の前提に立って研究を進めるといふスタンスはこの20年くらいの間によく認知されるようになってきたものである。私たちはこのような立場を「比較認知科学」と呼んでいる。最近はやりの進化心理学とは密接な共闘(?) 関係にはあるが、後者は主としてヒトのところに潜む「進化」の名残を探ろうとしているのに対し、われわれ比較認知科学者はヒトを含む現生種間の「比較」という手法を駆使して、ヒトのところの進化の過程を再構築し、さらにその理由にも答えよう

ともくろんでいる。また、比較認知科学は必然的に、認知能力の「収斂」のみならず、その多様な適応の様にも注意を向ける。これら2つの姿勢を車の両輪として研究が進展してきた。

チンパンジーとの研究を通して、彼らのところのありようの一端が少しは見えてきたように思う。ところを理解するためには、まずその入り口を知らなくてはだめだ。彼らが見ている世界、聞いている世界、触れている世界、というのはいったいどのようなものなのか。私の研究もこういった比較「知覚」研究からスタートした。私たちのところもチンパンジーのところも共通祖先から進化してきたということを前提にすれば、両者の知覚世界も大枠は差がないという研究結果は驚くべきものではない。形がどう見えているか、色がどう見えているかなどについては本当にヒトとチンパンジーでは差が見られない。音の聞こえ方については少し違いがあるようだ。私たちが言葉を使わずに話している周波数帯での聴力がヒトに比べてよくないというきわめて示唆に富む結果が小嶋祥三らによって得られている。

ものの見方について、彼らと私たちで大きく異なる可能性があるのは、見えている世界をいかにして「切り分け」、そしてそれらをどのように「まとめあげる」という点かもしれない。私たちは木よりもまず森を見るのに対し、チンパンジーはまず木を見てしまうのかもしれない。専門的な言葉でいえば、局所的な特徴に基づく処理か、それらの特徴の全体的な配置に基づく処理か、ということになる。ヒトとチンパンジーでは得られた情報の統合の程度が異なるのかもしれない。このような局所処理と全体処理の優位性の程度の種差が視覚認知の諸相において見いだされている。同様のことは聴覚認知の世界にも見られるのかもしれない。

どのように比較するか

しかし、注意しなくてはいけないのはこのような種差が見つかったときの「評価」だ。この違いはヒトとそれ以外の類人(hominoid)を分かつ重要な違いであるかもしれない。しかし、実は他の類人はみなヒト型なのにチンパンジーだけが分岐後の特殊な環境への適応の結果として全体処理を失った可能性もある。もしかすると、実はこの差はヒトとそれ以外の霊長類すべてを分かつものかもしれない。このような事例として有名なのは道具使用行動だろう。数年前までは野生下で道具使用を示す霊長類は(ヒトを含めて)、チンパンジーとオランウータンのみだった。他の類人、ゴリラやボノボでは道具使用が報告されていなかった。このようなモザイク状の現象を説明するためには系統発生的制約だけでは不十分だ。それぞれの種が適応してきた進化的環境という要因も考慮しなくてはならない。この話をさらに複雑にしているのは最近の研究成果だ。野生のゴリラでの道具使用が報告され、また、南米のフサオマキザルのナッツ割りがセンセーショナルに「発見」された。ところの進化を考える際の「系統発生的制約」と「環境適応」の重要性は増すばかりだ。要は、ヒトのところの進化の過程の中で変化していく能力の最もありうるべきストーリーを描くためには、ヒトとチンパンジーの比較だけでは不十分であるということだ。そういう意味では、チンパンジーでのところの研究は「問い」を生み出す研究でもある。

「比較」発達 — 発達も進化する —

ヒトとチンパンジーは約600万年前に共通祖先から分岐したと考えら

れている。ゴリラやオランウータンといった他の類人たちはさらにその数百万年前に分岐し、ニホンザルとの共通祖先との分岐年代になると約3000万年以上も前にさかのぼる。ちなみに霊長類という系統群が生まれたのは6500万年くらいだと考えられている。この悠久の時間軸の対極にあるのは個体が生まれて死ぬまでの時間、つまり「生涯発達」という時間軸だ。

「ヒトとチンパンジーの比較認知研究をしています」と自己紹介すると、「チンパンジーの知能ってヒトの何歳くらいなんですか?」とよく聞かれる。この問いは2つの面から不適切である。ひとつは、ところを構成する諸能力が均一に発達していくという誤った考え。もうひとつは、チンパンジーも発達する存在であるというきわめて当たり前の事実の見落としである。実は、この批判はそのままかつてのチンパンジー研究にも当てはまるものであった。つまり、かつてのチンパンジー研究には「発達」という観点が健全には組み込まれていなかったのだ。

「チンパンジー認知発達研究プロジェクト」

私の所属する京都大学霊長類研究所では、2000年からチンパンジーの

認知発達研究プロジェクトを始めた。このプロジェクトについてはこの数年間あちこちで話したり書いたりしてきたので、詳細は省くが、要するにこれまでの点と点の比較(成体のヒトとチンパンジーの比較)、線と点の比較(各種発達段階にあるヒトと静的な存在としての「チンパンジー」の比較)を、線と線の比較(ヒトとチンパンジーの発達過程を比較する)から、さらには面と面の比較(さまざまな認知能力のモザイク的な発達、あるいはモジュール的な発達の種間比較)を視野に入れて研究しようというのが10年前の比較認知発達研究プロジェクトだったのだ。

このとき私たちは、従来のチンパンジーの発達研究とはまったく異なるアプローチをとった。それは「交差養育法」の放棄、つまりヒトが育てたチンパンジーのところの成長ではなく、母親によって育てられ、その母親は同年代の他個体と世代を構成し、それが幾重にもかさなって築かれた「社会」の中で暮らす子どもたちのところの成長を縦断的に追いつけたのだ。

たとえば、その成果として、林美里らは先の道具使用の獲得につながる対象操作能力の発達過程を明らかにした。その中で、ヒトに比べてチンパンジーでは棒状のものを穴に差し込むという対象操作が比較的早く出



表情の弁別に挑戦するチンパンジー (撮影:京都大学霊長類研究所)



ヒト実験者の指差しに反応する2歳のチンパンジー・アユム
(撮影:毎日新聞社)

現することがわかった。この行動はシロアリ釣りやさまざまな道具使用行動の核になる「プロービング(probing、棒状のものをういた探索行動)」と呼ばれるものであり、その特異的な発達過程は彼らの道具使用文化を考える上でも興味深い。

また、社会的認知の側面では、明和政子・岡本早苗らとチンパンジーにおける視線の理解と共同注意の発達について調べた。その結果、「わたしとあなた」で成立する2者関係までは種差と呼べるほどのものは見つか

らなかったのだが、ヒトでは1歳前後に生じる共同注意(他者の見ているものに自らの視線も向けることによって注意を共有すること)の劇的な発達がチンパンジーではほとんど認められないことが明らかとなったのだ。この意味するところは大きい。共同注意を基盤として形成される「場」、つまり「わたしとあなたとモノ」によって構築される豊かな社会環境は、ヒトにとっては「心の理論」が醸成される場であり、ことばが獲得されていく場でもあるからだ。そのはじめの一

歩がチンパンジーには存在しない(かもしれない)。発達の時間軸がつまりだす「比較発達」研究には実はまだ未開の大地が残されているのだ。

第3の時間 —社会・文化・歴史という「時間」—

「比較認知科学研究に発達の時間軸を。これが本小論のメインメッセージです。おしまい。」と思っていたのだが、実はもう1つ、進化と発達の中間にある時間軸の存在にはうすうす感じていた。それは、「文化」という形で立ち現れる社会・歴史的時間軸だ。ヒトのこの研究では単純な文化間比較の時代は終わり、「文化心理学」の時代が到来している。文化とところの関係でよく聞くスローガンは「人間は文化をつくり、文化は人間を規定する」というところと文化の双方向的関係だろう。このような社会・歴史的時間軸を導入することによってヒトのこの生物学的普遍性と文化的多様性があらわになる。

さる2009年5月に彦根で開かれた「日本赤ちゃん学会」でのトゥールーズ第二大学の則松宏子さんの講演は私にとってはいまさらながらに目からうろこが落ちるような発表だった。食事場面における母子間の相互交渉の日仏文化比較が主たる内容だったが、日本の母親は積極的に赤ちゃんの発達を支援する(ヴィゴツキーが泣いて喜びそうな「足場作り」のオンパレード)のに対し、フランスでは母親が絶対的な「制空権」を行使し、赤ちゃんの行動をすみずみまでコントロールしていた。このような行動の背後にある発達観の圧倒的な違い!そしてその結果として、成長していく子どもたちのこのありようも明らかに異なるはずだ。そして彼らが次代の文化を築いていく。チンパンジーはどうだろうか。

チンパンジーの文化心理学

チンパンジーの研究においても「文化」の問題がこの10年の間にきわめて重要な問題としてクローズアップされてきた。特に道具使用のレポートの集団差などに代表される「物質文化」である。最近の研究ではチンパンジーが道具使用を行う場所の「発掘調査」が行われており、あるサイトでは、4300年前のヤシの実割りの石が見つかっている。このような長いスパンで受け継がれている道具使用行動はチンパンジーが生み出したものであるが、その「文化」がヒトと同

様にチンパンジーのこのありようを規定するということがあるのだろうか。ヤシの実割りをする文化とそうでない文化の間の生態学的な比較というのはこれまでもあったかもしれない。しかし、その文化が彼らの認識にいかなる影響を及ぼしているのか。そしてその文化で育つチンパンジーのこどもたちのこの発達にどのような影響を及ぼしているのだろうか。そういう観点からチンパンジーのこの追った研究というのはたぶん、ない。「比較文化(Cross-Cultural)」心理学ならぬ「比較」文化心理学だ。マクロ(進化)とミクロ(発達)で織り込まれたこの世界をその両者の中間の時間軸、いわばメゾスコピッ

クなタイムスケールで染めあげるとそこにはどのような模様が見えてくるのだろうか?

チンパンジーのこの研究を通して見えてくるもの、それはところを支える3つの時間軸だ。これらが縦横に絡み合っただけで私たちの(そしてチンパンジーたちの)ところが生み出されるのだろうか。

*このころいちばんお世話になった伏見貴夫さん(北里大学)がこの4月に亡くなられた。いまだに信じられない気持ちでいっぱいだが、本小論を彼に捧げご冥福を祈りたい。



西アフリカ、ギニア共和国ボソウの野生チンパンジーによるヤシの実割り。ここは、「進化」、「発達」、「文化」のクロスロードだ。
(写真提供:野上悦子(チンパンジーサンクチュアリ宇土))